

保育実習に関する研究

—実習評価について—

大久保 和子

I 目 的

保育（教育）実習の重要性は、次第に認められてきているが、現在の保育者養成の教育課程において、その内容に系統性をもたせ、その質を深めるには、実習内容の多様化、期間のこまぎれ、実習施設の不足など多くの問題がある。

本学のように、附属の実習施設をもたない場合の実習は、多数の実習生を幼児の質や保育の計画、方法、内容などが異なる多数の実習協力園へ全面的に依頼することになる。従って、大学側としては、実習目標、内容、方法の意見調整、ないし統一見解を求めた後、実施しているが、最終的には、その園の方針に添って実施されるのが実状である。

このような実習指導体制において、評価は関係者の深刻な問題の一つになっている。一般的に評価は、目標追求の過程の一部分であり、その活動を目標へ向かって調整するためのフィード・バック情報であるといわれている。実習評価は、実習生自身の自己評価と直接実習指導にあたった保育者の評価とによってなされる。これも、指導→評価→調整のサイクルによって、目標へより接近するための実習方法改善に役立つものでなければならない。そのためには、実習評価表は協力園に対して評価しやすいもので、実習生の実習活動が的確に評価できることが必要である。そこで私は、過去4年間にわたって実施した保育実習（保育所）と教育実習（幼稚園）の実習評価表の検討を試み、実習評価表改善と実習効果をあげるための指導調整の資料を得ようとするものである。

II 方 法

1. 保育実習・教育実習計画

種類 段階	保 育 実 習	教 育 実 習 I	教 育 実 習 II	
	観 察 ・ 参 加	参 加 ・ 部 分 指 導	参 加 ・ 指 導	
目 的	・保育所における保育活動の補助的役割を分担し、保母の職務、乳幼児の活動を経験的に理解する。	・幼稚園における教育活動の一部分の指導を分担し、指導計画の立案、指導方法などを理解し、実施する。	・学内で習得した知識や技能を総合的に応用し、教育活動の計画を立案実施し、指導技術を習得する。	
方法	時 期	1 年 次 ・ 12 月	2 年 次 ・ 6 月	2 年 次 ・ 11 月
	期 間	10 日 間	2 週 間	2 週 間
	実習園	保 育 所	幼 稚 園	幼 稚 園

2. 検討に使用した資料

昭和42年度～昭和45年度・実習履修者

保育実習（保育所）評価表 196名分

教育実習（幼稚園）評価表 301名分

(註) 資料処理にあたって評価段階は下記の記号で表わす。

優…A, 良…B, 可…C, その他…D

3. 検討の観点

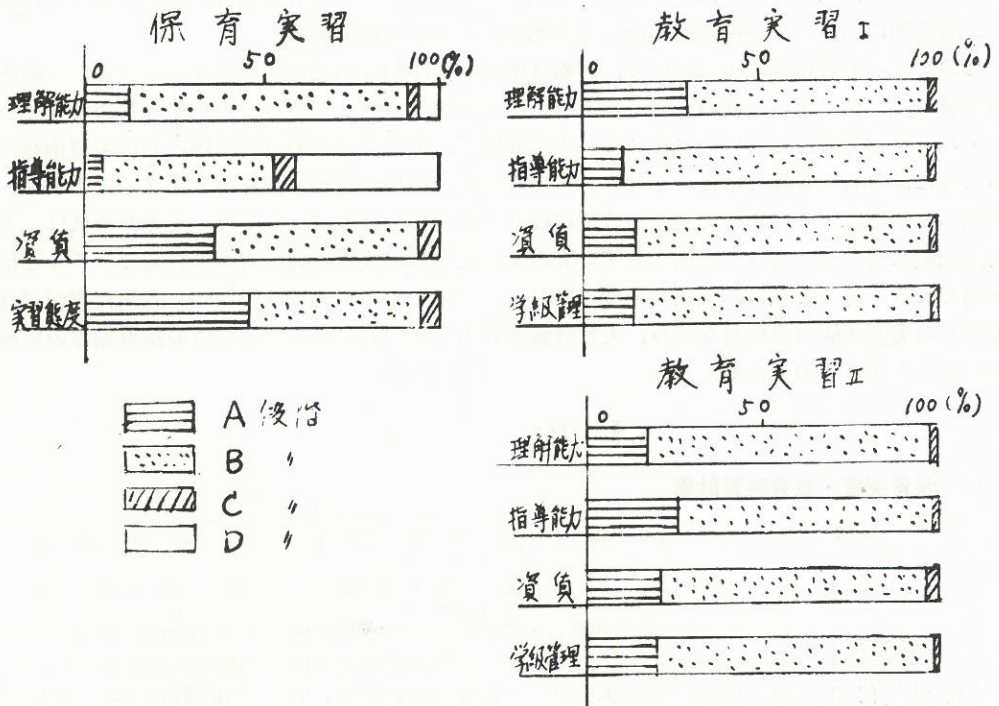
- 1) 現在使用している評価表は実習効果を測定する評価項目として適当であるか。
- 2) 評価尺度は、実習協力園によって違っているかどうか。
- 3) 実習指導者がのぞむ実習生像とはどんなものか。

Ⅲ 結果と考察

1. 実習効果と評価項目について

実習段階別に評価表をまとめたものが図Iである。これを実習目標と対応しながら、その効果を項目別に考察する。

図1 実習評価結果



1) 保育所における観察・参加実習では、実習態度や資質に関する評価は、かなり高く、C段階がわずかに6%程度みられるだけである。理解能力はA段階が11.22%と少なく、大部分がB段階である。またD段階は、わずかではあるが評価されないものもある。指導能力は、A段階が3.57%と非常に少なく、D段階が40.31%でかなり多い。この実習が指導保育、幼児との人格のふれ合いの中で乳幼児の心身の発達の特徴、1日の生活、保育者の役割などを理解することの目的から考えると、指導能力を評価する内容や活動がやや乏しく思われるので、この段階での評価の困難さを示しているように思われる。しかし、理解能力においては、評価が低だけでなく、一部の指導保育が評価していないことは注目しなければならない。

2) 幼稚園の参加・部分実習では、理解能力の評価が最も高く、A段階が29.13%である。

指導能力・学級管理、資質はいずれも低く、A段階が10%程度で80%以上がB段階である。このように、1年次の観察、参加の段階で低かった理解能力の評価が高くなっていることは、実習園が変わっただけでなく、この実習が先行経験の上に積まれたものであること、その間の学内での学習によるものではなかろうか。しかし、指導能力については、生活指導や各領域の指導を部分的に受け持ち、実習活動をしているがその効果は低い。

また、この実習評価でC段階が皆無に等しく、大部分がB段階に集中していることから評価基準が問題となる。

3) 幼稚園の指導実習では、幼児理解、教材などに対する理解能力が28.0%、指導能力が26.67%とA段階が高くなっていることは、実習の目標に対してのぞましい結果と考えられる。学級管理、資質はA段階がやや多くなり、20%程度である。

以上をまとめると観察、参加実習では、実習生の資質、実習態度などが重点的に評価され、その評価も高い。しかし理解能力、指導能力などの能力評価は低く、また評価項目としても考慮しなければならないようである。

次に、参加・部分、指導実習では、幼児の欲求、教材などに対する理解、指導などの評価は上昇しているがどの評価項目もC段階の評価が非常に少なく、B段階が圧倒的に多い。このことから評価基準の明確化と評価段階の検討が提起される。

2. 実習評価の協力園別傾向について

評価表は、多数の実習協力園の保育者と園長によって評価され、大学側へ提出される。

実習園は異なった尺度や重点で評価していることが考えられるので、保育実習については、岡山市内8ヶ所の保育所、教育実習では、昭和45年度に実習園となった岡山市内、倉敷市内、総社市内の14ヶ所の幼稚園について、実習園別によるその評価の傾向をみる。

今回は、特に評価段階Aについて、考察する。

1) 保育実習については表1に表わす。

表1 保育実習における実習園別比較 (%)

園名 項目	a	b	c	d	e	f	g	h
理解能力	8.33	0	16.67	33.33	18.75	0	16.0	0
指導能力	0	0	8.33	22.22	3.13	0	12.0	0
実習態度	45.83	12.3	70.83	55.56	50.0	16.67	56.0	50.0
資質	41.67	0	62.50	50.0	40.63	16.67	44.0	20.83

(1) 理解能力、指導能力ともに0、また20%以下で、実習態度、資質が40~70%の高率になっているものが5園ある。(a, c, e, g, h)

(2) 理解能力、指導能力、実習態度、資質いずれの項目も0または20%以下ときびしい園が2園ある。(b, f)

表2 教育実習Iにおける実習園別比較 (%)

園名 項目	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト
理解能力	0	20	20	25.0	0	0	0
指導能力	0	30	10	12.5	0	25.0	0
資質	33.33	50	100	12.5	87.5	25.0	100
学級管理	33.33	20	10	12.5	0	0	0

表3 教育実習Ⅱにおける実習園別比較

(%)

項目 \ 園名	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
理解能力	100	30	87.5	42.86	0	12.5	66.67
指導能力	33.33	30	75.0	42.86	0	25.0	33.33
資質	33.33	10	50	14.29	0	0	33.33
学級管理	33.33	0	37.5	42.86	25.0	25.0	0

2) 教育実習Ⅰは表2に表わす。

(1) 資質のみが50%~100%の高率で、他の項目は0または20%以下のものが4園ある。(ロ, ハ, ホ, ト)

(2) 理解能力を除いて他の項目の割合が一定しているもの(ニ)

3) 教育実習Ⅱについては表3に表わす。

(1) 理解能力のみが66.67%~100%とかなり高く、他の項目が30%位のもの2園ある。

(①, ⑦)

(2) 理解能力, 指導能力の割合が全く同じものが2園ある。(②, ④)

(3) 学級管理だけA段階があって、他の項目は全くないもの。

(4) どの項目にも比較的高い率のもの。

以上のように、実習段階の目標に対して、「よい」評価はさまざまであるが、そのなかに幾つかの傾向を見ることは興味深い。

3. 評価の観点について

実習評価における価値段階は、評価を行なう者の思想に依存する。実習園の数多い保育者(教師)は決して統一された保育観をもち、同じ保育者像を求めているとは思われない。しかし今日の社会で受け容れられている実践者は、その多くが共通した価値観をもって実習生を評価していると考えられる。

そこで、これらの実習評価表に記入されている実習生への批評を分析し、帰納的方法により、実習協力園の保育者がのぞむよい保育実習生像を探るとともに、評価の観点を把握したい。

分析結果は、①資質に関するもの②実習態度に関するもの③理解能力に関するもの④指導に関するものに大別し、まとめたものが表4である。

表4 批評分析の項目別集計表

項目 \ 段階 頻数	保育実習		教育実習Ⅰ		教育実習Ⅱ	
	f	%	f	%	f	%
資質に関するもの	121	25.05	156	29.49	138	26.56
実習態度に関するもの	209	43.26	174	32.89	171	32.45
理解能力に関するもの	82	16.97	50	9.29	46	8.73
指導に関するもの	71	14.72	87	28.33	179	33.26
計	483	100	529	100	527	100

この表から明らかなように、どの実習においても、実習指導者は、実習生ひとりひとりについて細かく批評していることである。

実習段階別に全体を考察すると、観察・参加実習では、実習態度に関するものが43.26%を占め、つづいて資質に関するもの25.05%である。

参加・部分実習では、実習態度に関するものが最も多いが、その割合はやや減少し、資質と指導に関するものが多くなり同程度になっている。

指導実習では、指導に関するものが最も多くなり33.26%、実習態度、資質に関するものとはほぼ同程度である。しかし、理解能力に関するものは非常に少なく、特に幼稚園実習では10%以下である。以上のことから実習段階別に、実習指導者の評価の重さを理解することができる。

次に、これらの批評の内容をよいもの、わるいものに分類し、頻度の多い順に第5位まで列挙したものが表5である。これによりそれぞれの内容を具体的に考察する。

1) 資質に関するもの

(イ) 明朗快活であること

保育実習、教育実習共通してよい資質の第1位である。このことは、幼児が本来、明朗であること、保育者の気持ちの持ち方が幼児の心や行動に大きく影響を与えることなどから、幼児とともに遊び、活動する実習生は常に健康で明朗快活な性格の持ち主であることが強く要求されるのであろう。

(ロ) 敏感であること

保育実習で第2位、教育実習で第4位、5位にあげられており、また敏感性に欠けるものがわるい点の第2位にあることなどから、実習生は鋭い感覚を持ち、臨機応変に行動する柔軟性、機をみる敏感さなどを持つようにのぞまれている。

(ハ) 協調性があること

どの実習においても第3位であることは、常に実習生同志の和が保たれ、実習園の指導者、その他の職員と相互に意見交換ができること、自分勝手に独走せず、協力態勢がくめることがのぞましく、協調性のある人柄が要求されている。

(ニ) 責任感があること

保育実習では第4位であるが、教育実習では明朗快活な性格について第2位である。それは、実習生といえども、自分が起こした実習上の失敗や責任を回避することなく、自らの責任は十分果たすことが必要とされているからであらう。

(ホ) 表情が豊かであること

保育実習では、笑顔のよいものが第4位、表情に乏しいものがわるい点の第1位であることから、表情豊かな人柄をかなり強く望んでいるのは、保育所の特色といえよう。

以上は、実習園の指導者が実習生にのぞむ人格的、性格的要素の主なものと思われる。

2) 実習態度に関するもの

(イ) まじめな態度

どの実習でも第1位にあるよい態度である。

それは、保育者の使命の重大さを自覚し、自分がよりよい保育者となるために、誠実に努力する姿勢を求めていると思われる。

(ロ) 積極的で意欲的な態度

いずれの実習においても第3位までにあるよい態度である。また、おとなしく、消極的な態度はわるいものの第1位になっている。これらのことから、学習意欲に対して重点がおかれて

(%)

表 5 実習指導者の実習生に対する批評分析結果

項目	順位 段階	第 1 位			第 2 位			第 3 位			第 4 位			第 5 位					
		明朗	快活	活	敏感	責任	性	14.88	協	調	性	11.57	笑	顔	8.25	責	任	感	性
資質に関するもの	保 教Ⅰ	24.34	15.70	29.71	24.34	16.03	14.49	11.54	11.54	10.87	11.57	11.54	8.25	11.54	10.14	7.44	5.13	7.25	
	保 教Ⅱ	13.22	12.18	7.97	12.39	7.05	1.45	1.65	2.56	1.45	1.65	1.28	1.65	1.28					
実習する態度もこの	保 教Ⅰ	28.23	20.11	19.88	28.23	20.11	19.88	13.48	16.60	15.20	11.00	15.52	10.05	13.22	6.78				
	保 教Ⅱ	20.57	16.67	14.04	2.87	2.30	2.92	2.87	2.30	2.92	2.39	1.72	1.44	2.34					
	保 教Ⅰ	20.75	34.0	39.13	20.75	34.0	39.13	14.63	22.0	30.43	13.41	16.0	6.10	6.10					
	保 教Ⅱ	18.0	15.22		18.0	15.22		14.63	22.0	30.43	13.41	16.0	6.10	6.10					
指導に関するもの	保 教Ⅰ	16.67	10.34	9.50	16.67	10.34	9.50	6.94	6.90	6.70	5.56	5.75	2.78	5.75	4.17	2.78	4.88	5.02	
	保 教Ⅱ	12.50	11.49	11.73	12.50	11.49	11.73	6.94	6.90	6.70	5.56	5.75	2.78	5.75	4.17	2.78	4.88	5.02	
	保 教Ⅰ	11.49	11.73		11.49	11.73		6.94	6.90	6.70	5.56	5.75	2.78	5.75	4.17	2.78	4.88	5.02	
	保 教Ⅱ	11.73			11.73			6.94	6.90	6.70	5.56	5.75	2.78	5.75	4.17	2.78	4.88	5.02	

いることがわかる。短期間にできるだけ多くの経験を得、実習を効果あるものにしようと傍観的でなく、積極的に質問をしたり、思い切って何ごととも体験してみようとする意欲的態度が大切にされている。

(イ) 子どもとよく接すること

保育実習、教育実習、いずれも第4位、3位である。よい実習生は、幼児とともに生活し、幼児から信頼されることによって、幼児への真の愛情を感じ、教育するよろこびをもつことになるであろう。

(ロ) 熱心で研究的態度

保育実習では第2位、教育実習では、第4位、3位となっている。保育の仕事はむずかしく、問題が多い。これらの困難に遭遇したとき、熱心に研究し、問題解決のための努力を惜しまない態度をのぞんでいると考えられる。

(ハ) 機敏に動く

保育実習では、機敏に動くものが第4位によい態度となり、行動の鈍いものがわるいものの第2位になっている。このことは、実習生が健康な身体の持ち主であるとともに敏捷に行動できることをのぞんでいる。

その他に、保育実習では、あいさつ、服装、ことばなど外見や言語に関するものもあり、教育実習では、時間的観念を指摘した批評もある。

3) 理解能に関するもの

どの実習も共通して、観察が細かくできる、幼児の理解は不十分であるが理解しようとする態度がよいなどがよい点としてあげられている。このことは、実習生が理論として幼児の成長発達の段階や、幼児の心理について学習した知識どおりにいかない現実の複雑多様な幼児の実態に接し、驚いたり、困惑するとき、その実態をより正確にとらえるよう努力しなければならないであろう。その姿勢を指示しているようである。

4) 指導に関するもの

実習の段階別に批評の観点が異なっているので、それにそって考察する。

(1) 子どもへの接し方がよいものが第1位であり、つづいて実習記録のとり方、環境整備、指導技術（特に童話、紙しばいなど）のよいものである。ここでは、実習生が乳幼児と好ましい関係が作れることを第1に考え、環境整備（掃除・片づけなど）も保育技術として重要視していることが伺える。また指導技術の研究を今後の課題として示している。

(2) 教育実習Ⅰでは問題意識をもってよく質問する態度を第1位にあげている。つづいて、教材研究がよくできる、環境整備ができる、指導計画の立案・準備がよくできるの順である。わるいものとして第4位になっている幼児へのことばは、早口、不明瞭、声が大きすぎる、小さい、荒い、アクセントなどであり、実習生が及ぼす影響力の大きさから大切な技術の一つとなっているようである。

(3) 指導実習では、先ず計画の立案、準備ができることが第1で、つづいて教材研究がよくできる、指導技術に工夫がみられるなどである。このことは、実習生が実習園のもつ保育目標を早く理解し、幼児の発達段階に即した指導計画の立案、準備ができ、教材研究を広く行ない、保育の方法については、よく考え、創意工夫することをのぞんでいると思われる。

Ⅳ ま と め

本研究は、附属の実習施設をもたない本学が、実習協力園に対し依頼している評価表の検討により、その問題点を明らかにし、今後の実習評価表改善の資料と実習方法調整の手がかりを

得ようとするものである。その結果をまとめると次のようになる。

1) 実習評価表については、評価項目に関するものと、評価基準に関する問題点が把握された。まず、評価項目については、観察・参加実習の段階での理解能力、指導能力である。これらの能力評価は、学生の基礎知識が十分でなく、実習期間も短かい関係から、困難が予想されるが、実習目標、内容、方法の検討とあわせて、この段階にふさわしい項目の改善が今後の課題となろう。

評価基準については、優、良、可の3段階では、実際には、優、良の2段階になり、特別のものを除いては、可はつけにくいようである。今後は、目標追求活動の修正・調整に役立つように、目標の具体化と評価基準の明確化がなされなければならないであろう。

2) 実習目標に対する価値判断は、実習園により、さまざまであり、学内における多面的な評価の必要性和、実習園との連絡など、今後の指導資料を得る。

3) 実習指導者が、実習生に対して要求している資質、実習態度、指導力などの具体的要素をまとめると次のようになる。

(1) 資質に関するもの

- ・明朗快活　・責任感　・協調性　・敏感性　やさしく、細かな心づかい
- ・表情が豊かである、など。

(2) 実習態度に関するもの

- ・まじめで研究的　・積極的で意欲的　・幼児とよく接する　・機敏に動く
- ・落ち着きがある、など。

(3) 理解能力に関するもの

- ・観察が細かくできる　・理解しようと努力をする
- ・幼児の実態、保育計画などの理解がよい、など。

(4) 指導に関するもの

- ・幼児への働きかけがよい　・問題意識をもっている　・環境整備がよくできる
- ・実習記録が適切である　・教材研究ができる　・計画の立案準備がよい
- ・指導技術の工夫ができる　・幼児の掌握ができる、など。

これらを、西本脩が演繹的方法により求めた理想の保育者像と比較してみると能力、学識に関する条件はほとんどとりあげられていないが、その他の条件については、ほぼ一致している。また、資質、実習態度に関するものに重点がおかれていることは、今日の保育が、人格形成の基礎づけをねらい、幼児の全体的なパーソナリティーの調和のとれた発達を助けようとするところに保育者にも、その人のパーソナリティーが重要な条件となっているためであろう、

この結果は、学生自身が自己を客観的に知り、将来の保育者として長所をさらに伸ばし、短所を補うために役立てるとともに、大学側としても、学内での実習事前指導、実習形態、評価の観点など、多くの反省資料を得たので、今後の実習指導に役立てたい。

参 考 文 献

- 続　有　恒著：教育評価
- 珠川　善子共著：保育所実習
- 日名子太郎著：保育実習
- 堀内　康人編：保育の管理
- 日本教育大学協会編：教育実習の研究
- 中央幼児教育研究会：保育実習の手引
- 岡田　正章著：保育原理
- 厚生省児童家庭局：保母養成専門教科教授内容ソースブック
- 岡山県立短期大学研究紀要　第16号　一須見喜六一：保育実習の効果に関する心理学的研究